〔翻訳〕

ロベルト・ミヘルスの同時代人論 (6)

――アウグスト・ベーベル――

氏家伸一

本稿はロベルト・ミヘルス（一八七六―一九三六）の『重要人物―性格学的研究』“Bdeutende Männer—Charakterologische Studien”（1927）におさめられた「アウグスト・ベーベル」の翻訳である。六番目にとりあげたとはいえ、実はこれは本書の第一章をなしている。これは象徴的である。というのも、ほかならぬベーベルに率いられたドイツ社会民主党での活動こそミヘルスの政治的、思想的原体験だったからである。

ケルンの「百万長者の息子」として生まれたミヘルスは「一八九〇年代の若いドイツ知識人の目覚めた少数者たちの間に広がった社会批判的風潮」に強くとらえられ社会主義へと「改宗」した。将校としての職、プロイセン・ドイツ国家、カトリックの大ブルジョアの家柄と訣別し、「革命的社会主義者」たちの世界へと入っていった。コンツェによれば、ミヘルスを彼らに結びつけたものは、「国家的・君主的権威に対する嫌悪、軽薄な上層階級の無思慮な習慣的生活に対する倦き、そして、公正な社会秩序に対する期待」であった。しかし社会民主党も彼の希望をみたしてはくれなかった。「ドイツ社会民主党の中で、彼はほどなく、革命の高揚を麻痺させていたすべての物にぶつかった。すなわち、組織に対する過大評価。すぐ妥協したがる議会主義。あたかも永久に存続するかのような党執行部の支配。そしてさらに、〈精神あるいは意思による少数の力を（権利についてはさらに）〉信ぜず、つねに、〈祖国のために死ぬ〉覚悟ができていることを強調する〈多数派政治家〉である、下士官の息子ベーベルに。もしミヘルスが軍隊の形をよそおったプロシャ国家から逃げ

ることができたとするならば、彼は、ベーベルの姿の中に、彼にとってははるかにつらい形で――よりにもよって、革命的マルクス主義という衣をまとって！――もう一度、それを見たのであった。」（コンツェ、『政党政治の社会学』新版へのあとがき）

このベーベル論ははじめは彼が死去した一九一三年に書かれた。追悼文としての性格上先のような批判的視点からのベーベル像は後ろに退き、むしろ「偉大な政党指導者」、「プロレタリア運動の生みだした典型的な現代の大衆指導者」としてのベーベルが個人的な逸話もまじえて巧みに描かれている。ここでミヘルスは分析者としてよりも、人間性を鋭く観察するジャーナリストとしての力量を遺憾なく発揮している。一方、「ベーベルは党のみならず、現代のドイツ労働者階級の成立にも立ち会っていた」と述べられているように、ベーベルを語ることはドイツの労働運動と社会民主党について語ることに等しいということもできた。

ところでベーベルは優れた大衆運動の指導者であるのみならず、独学者であり「有能な著述家」でもあったといわれる。『婦人論』として邦訳もされた彼の『女性と社会主義』（一八七九）は「マルクス主義女性論」の古典（水田珠枝『女性解放思想の歩み』岩波新書）といわれるが、そのなかで詳細に描かれた社会主義未来社会像に対するミヘルスの批判は興味深い。職業の自主的選択と行政、都市と農村の矛盾、教育問題、分業をめぐる人間の一面化と全面発達の問題、そして貨幣と犯罪にかんするオプティミズム、これらにかんするベーベルの空想的なほどの楽観主義に対するミヘルスの現実主義的対応は概ね理解できる。このころのミヘルスが既に社会主義的ロマン主義を放棄していたことがわかる。ミヘルスの判断は現代でも有効である。というのも、水田によれば、その社会主義社会に対する楽観主義のために「かれにあっては、女性問題の複雑性を直視するよりは、すべてを社会主義革命に結びつける結果になってしまった」からである。

ここで是非とも指摘されねばならない事実がある。ほとんど知られていないが、ミヘルス自身、性道徳とフェミニズムに関していくつかの論稿を物しているのである。今日やっとそれらの研究と評価がはじまった。（cf. *Pino Ferraris*: Questione femminile e morale sessuale nell'evoluzione politica di Roberto Michels, in "Roberto Michels: Economia Sociologia Politica" a cura di Riccardo Faucci, Torino 1989.）

ベーベルは社会主義者である以上に党員であった、というミヘルスの指摘は正鵠を得ている。彼は「党への愛」に生き、「党の統一と保持」を最重視した。自己目的と化していく党組織の論理は『政党政治の社会学』の中心テーマであった。また、ドイツ・プロレタリアートの「行動力の欠如」にマルクス主義が合致していたという指摘は、もと急進派ミヘルスならではの指摘といってよいだろう。主体性無き歴史発展必然論は所詮革命待望論でしかなかった。

ドイツ・プロレタリアートの心理学的分析は後に『反資本主義的大衆運動の心理学』(Psychologie der antikapitalistischen Massenbewegungen, in :Grundriß der Sozialökonomie, 9. Abteilung, 1. Teil, Tübingen, 1926.)にまとめられるが、ここでもその権威主義が指摘されている。ルターの肖像画がベーベルのに置き換えられただけという逸話は有名である。

終わりに近いところでミヘルスは、ベーベルの議会主義路線と彼自身の性格が理想主義に燃えた若い知識人を党からはじきだしたと責めている。その結果党は「退屈で平凡、鈍重で不活発なものと化してしまった。」ミヘルス自身そのような若者の一人であったことが思いだされる。

アウグスト・ベーベル
Archiv für Sozialwissenschaft unb Sozialpolitik. XXXVII, Hefte 3. Nov. 1913.

偉大な政党指導者の歴史的記憶というものは常に一定しているというわけではない。それは党に与えられた運命の消長に左右されるからである。党の勝利は指導者の名を不滅のものにする。彼のための記念物が雨後の筍の如く生み出される。歴史書では彼の行動、彼の言葉、彼の思想が熱狂的な頌歌の形で、永久に記憶さるべく次世代の心に刻み込まれる。彼もしくは少なくとも彼の後継者の造り変えた国家が存立する限り彼は英雄として生き続けるのである。もし一八六六年にビスマルクが失墜していたとしたら、彼の追憶はドイツに対する兄弟殺し、冒瀆者としてのみ生きのび得たであろう。たとえ一八七〇年の最後のクーデターが成功しなかったとしても、ビスマルク像はたった一つも天にそびえ立つことはなかった。マッツィーニの夢は半分しか実現されなかった。待ちこがれたイタリアの統一は事実となった。しかし、それと不可分の付随理念である共和国は遂に形を成さなかった。マッツィーニが残した党は現在、昔に比べると遥かに権力から遠いとこ

ろにいる。その結果どうなったか。我々は今日、マッツィーニが自由の英雄としてではなく統一の英雄として賛美されていることを知っている。不徹底にとどまった彼のライフワークは彼の思い出に半神としての権利を授けてはいる。もしも今日のイタリアが共和制的な国家形態を示しているなら、イタリア人の愛国主義はマッツィーニを神として崇拝したことであろう。同じ法則はベーベルにもあてはまる。既に死の数カ月後には、アウグスト・ベーベルの歴史的評価にこれと類似した星占いをなすことが出来たからである。今後彼の名声が上昇するかそれとも下降するか、それは誰にもわからない。

彼の同志の側ではむろんのこと、この党の領袖には聖徒に列せられることが保障されている。ベーベルはいついかなる時でも党の讃えるところとなり、彼の演説や著述は蒐集され、拝読され、メーデーや他の社会主義の記念日には彼の胸像がマルクスやエンゲルスのそれと並んで名誉ある席を占めている。しかし国家機関や国民の中の大量の教養人にあっても、既に彼の存命中に彼の評判は定っていた。なるほど彼の善良なドイツ人らしい家族的性格はそれをやわらげる理由とはなったものの、それは、ためらうことなく彼を祖国を傷つける輩、非実際的な政治家と非難する底の評価であった。偉大なドイツの国民指導者の追憶に対するこの公式的刻印は今日も同じ様に確立している。それを覆し得るのは、この故人の心情と信念の継承者がプロイセン国家を滅ぼすか、もしくは少なくともそれを自らの精神で満たし、支配権を手に入れることに成功した時だけである。その時初めてアウグスト・ベーベルはウンター・デン・リンデンに故フリードリッヒと並んで記念像を立ててもらい、ささげ筒をする首都の衛戍の整列する中、帝国宰相に除幕されるであろう。ダントンも又、パリのサンジェルマン大通りに巨大な青銅の立像を立ててもらった。そして生存中のダントンはベーベル以上に自党の反対者を傷つけていたのである。

しかしながら、重要な個性的人物の評価は、成功とか失敗の結晶化から切り離し、純粋な光の下で考察するのが社会科学者の本分でなければならない。確かに大衆文学の次元ではどの重要人物の場合も、「彼の人物像は諸党の愛憎によってゆがめられ、歴史の中を揺れ動く」と表しうる。しかし科学は可能な限り、この人物像を定着させることを目差さねばならない。

ベーベルは多くの点で、プロレタリア運動が生み出した典型的な現代の大衆指導者であった。(1) たとえすぐにこうつけ加

えねばならないとしてもそうだったのである。つまり彼は知的にも道徳的にも平均的な同輩を遥かに抜きん出ていただけではなく、非常に強く個性的な特徴をそなえてもいたのであり、そのため大衆指導者よりもその人間が常に表面に現われ、こうしてベーベルの本質は現代政党制からだけでは理解出来ないほどなのである。

（1）Vgl. *Robert Michels*: Zur Soziologie des Parteiwesens in der modernen Demokratie. 2. Aufl. Leipzig 1925. Kröner, S. 259 ff.

ベーベルの大衆に対する影響力という点では、安んじてマルクス、エンゲルス、ラッサールのそれと比べ得る。それどころか、ベーベルの影響力の方が大きかったとさえ主張できる。ベーベルは彼らに比べると優れて指導者、代表者、案内人であったのである。マルクスは危険を遠く離れて自分の書斎やロンドンの大英博物館に座っており、ケルンのライン新聞を編集した一八四二、三年と、時折職工や労働者の集会で話をした[1]以外ドイツの労働者とは接触しなかった。ドイツのプロレタリアにとって彼は今日でも非人格的なオリンポスの神の如きものにとどまっている。彼らはマルクスを驚嘆の目をもって見上げはすれ、内面的なつながりを一切もたず、その教説は二重に水増しされた形でのみ理解している。エンゲルスはというと、副業的にのみ社会民主主義者であり、本業の方は工場経営者であった。彼が晩年副業と本業を交替させた時、既に彼自身オリンポスの副神と化していた。もっともマルクスよりも世俗的な神ではあったが。つまり第二の神ではなく、大衆のみるところではむしろ、もはや、せいぜい実際問題に於ける顧問としての独自性を主張しうるエピゴーネンであった。彼が一八九三年最後の大陸旅行に出た際、チェーリッヒとウィーンで彼に拍手喝采をおくった人達は、本当の労働者大衆というよりもむしろ、高い見識を有した同志である職業政治家の大群であった。ラッサールにいたっては、結局、全くの君主的人間、独裁者であり、歓声をあげる労働者を自分のまわりに集める場合はいつも、理論と実践に於いてすっかり英雄崇拝にとりつかれた当時の青年労働者の一群が重要となった。彼らにとっては自分達の一員としてのラッサールよりも、口達者で裕福な弁護士としてのラッサールの方が驚嘆に値したのである。

（1）Vgl. *Hans Stein*: Der Kölner Arbeiterverein (1848-1849). Ein Beitrag zur Fröhgeschichte des rheinischen Sozialismus. Köln a. Rh, 1921. Gilsbach u Co.

それに対してアウグスト・ベーベルを大衆にとって愛すべき価値のある、親しみやすい彼らの仲間たらしめたもの、それはまさに、彼の第一の特性がその学問にあったのではないということである。彼はマルクスやエンゲルスやラッサールのように知識人ではなく、人望家であり、骨の髄から庶民であった。ベーベルを紛れもないドイツ数百万プロレタリアの代表者として描こうとした者もいる。適当に斟酌するならそれは精神的にも政治的にも非常に正当なことであった。しかし社会的には、子細にみるなら、この命題にすみやかに同意するわけにはいかない。社会民主党の新聞が伍長の息子ベーベルを系図的にも「プロレタリアートの産物」として主張し、彼は悲惨な境遇から身を起こしてきたのだと示唆するのであれば、やはりこう問わねばならない。いつから伍長はプロレタリアートになったのか、いつから職人の親方や旅商人――当時の一種の職業であった遍歴時代を別にすれば、ベーベルは長い間、金銭的事情が彼の力を残りなく政治問題に投入することを許すようになるまで、親方であり旅商人であった――は狭義の労働者に組み入れられるようになったのか。それにしてもベーベルが孤児としての数年間貧困の苦しみを味わったという事実は認められる。そのうえ彼は、自分の社会

層に属しながら下層の人民諸階級の運動で卓越した地位をも占めるようになった数少ない人々の一人となったのである。

確かなことが一つある。即ち、大多数のドイツ人労働者がベーベルを社会的にも自分達の一員、つまり、社会民主党員としてのみならずプロレタリア階級の仲間として感じたという事実は否定出来ないし、又否定すべきでもない。さてここにこそ注目すべき現象が存在する。それは一部は、ベーベルの純人間的な、つつましく素朴な本性、即ち、労働者との交流でも示され、彼の外観、清潔ではあるが野暮ったく不格好な服装にも現われた本性からもうかがえる。しかしドイツの平均的労働者と彼らのベーベル、根本的には急進的な小ブルジョアであり、そうあり続けたベーベルとをむすびつけた親密な共同性とは、まさしくこの小ブルジョア的特質の共通性にこそ基づいていたのである。(1) というのも、生産過程における位置を問題とする限り、革命的なドイツ、プロレタリア大衆が本物のプロレタリアであることは疑うべくもないのだが、彼らは、歴史的な理由、それにもしかしたら人種的な理由からも、根深い小ブルジョア的風貌というものを身に帯びていたからである。

（1）　これは特に上層階級から社会民主党に入党してきた数少ない者にはまるで一つの汚点のように強い印象を与えたのである。

vgl. Lily Braun: Memoiren einer Sozialistin. Kampfjahren 1911. Langen, S. 160.

ベーベルが他の誰よりも大衆の信頼を得ることが出来た原因は彼の親しみやすさにあった。彼の語る言葉は彼らの言葉であり、彼の振る舞い方は彼らのそれであった。彼らから彼を分つものは深遠な理論展開ではなかった。新しい法則を打ち立てることは彼には無縁であった。彼は政治的実践の男だったのである。彼は彼らのものであった。彼が徹頭徹尾議会人であることを大衆は妨げもしなかった。その逆である。帝国議会の演壇から彼は労働する民衆について語り、それどころか、しばしばそう思われたがっていたのだが、労働する民衆に向って語り、常にあらゆるところで表出された民衆の苦悩、民衆の要求について語った。彼にはすべてがわかっていた。支配階級の代表者とプロイセン王の眼前で彼は、あらゆる言葉によって、あらゆる視点から、どんな些事についても、全身全霊を傾けて困窮する人々の問題をとり上げた。社会民主党の大量の出版物の中で彼の訴えは幾度も鳴り響いた。憤怒と希望とが力強い総合の中で溶け合ったベーベルの迫力に満ちた新しい言葉のために大衆の心が感動にうちふるえない月、大衆の感覚がこの代弁者の感覚との新しい結婚を祝さない月はほとんど無かった。彼らの中でマルクスを読んだことのある者がいるだろうか。ところがベーベルの帝国議会、党大会に於ける演説は彼ら全員が読んでいたのである。マルクスについて労働者達は一年に一度、メーデーに元気な演説者が共産党宣言からひとくさり話をする時くらいしか耳にはしなかった。ベーベルについては、彼らが新聞を手にとるや否や目に入ってくるのであった。

ベーベルに集中的に寄せられた熱狂と尊敬には、しかしながら別の原因もあった。ベーベルは党のみならず、現代のドイツ労働者階級の成立にも立ち会っていたのである。一八六〇年代後半における彼の重々しくゆっくりした社会主義への発展、磁石のように吸引力のある世界観の熱狂的な吸収ではなく、苦悩に満ちた洞察と漸進的な信念の成熟が、労働者階級の中の知的に秀でた政治的関心の旺盛なグループの辿った発展であった。続く何年間かこの預言者――これはベーベルの中で目ましに強くなっていったのだが――は二重に好都合な活躍舞台を見出した。当時の労働者大衆はまだ教育を受けてはいず、教会との未だ解き難い絆のために無邪気な信仰を容易に受け入れていた。ナウマンは次のような話を聞いたことがあるという。一八六七年、もしくは一八六八年にベーベ

ルが彼の初めての選挙区に姿を現わした時、人々は彼の回りに群がり、自分達の希望の実現を心から憧れながら彼をみつめていた。その憧れの気持は体験した者の記憶の中に深くきざみこまれている。社会民主党をどのように考えるにせよ、これらの人々の述べるところを無感動に聞きながすことは出来ないであろう、と。(1) しかしながら、この決して完全には満たされたことの無い、救済の言葉への渇望は、ただ運動の青年期にのみ根をもっていたわけではない。六〇年代の終り頃のドイツ・プロレタリアートは真近にせまった事物の根本的な変革に対して特別に敏感だった。このことはドイツの若い工業がフランスの百万長者にじっと我慢し、ドイツ経済史年誌に「創設期」という呼称の下に残るであろう短い時代が終った後により一層あてはまる。(2) 一八六〇年から七八年までのドイツは、国民経済学的乃至社会的にそれと対応する一八〇七年から五五年にかけてのイギリスと安んじて対照しえる。機械マニュファクチャーの台頭、交通手段の改善並びに交易運輸、なかんずく取引所制度の組織改善によって新生面を開かれた生産の向上はドイツに、半世紀前にイギリスで示されたとほぼ同様の随伴現象を召来した。生産の改良並びに迅速化と労働者大衆の〔生活……訳者注、以下同じ〕向上は併行して進んだわけではなく、むしろ逆に、近代資本主義の青年時代は労働者階級の慢性的苦患に多くの急性疾患を付け加えただけである、という命題を提起し得るのである。それ故大衆窮乏化論は完全に妥当した。それは一人マルクスの頭脳から生まれたのではなく、同時代のすべての社会主義者と、一九世前半の相当数にのぼるブルジョア的国民経済学徒にも、ほとんどステレオタイプと呼べるような形で見出せるのである。(3) 従ってアウグスト・ベーベルという威厳と才能のある公明正大な男が深い自信に満ちた声で、このホールに集まった者で解放のあかつきを経験しない者は自分を含めて極くわずかしかいないであろう、というような言葉を発し得た時、おののき苦しんでいる労働者の心はかけがえのない希望の喜びでいっぱいになり、彼らは大挙して、ベーベルの代表する党へとおしよせざるを得なかったのである。(4) ベーベルが、来るべき革命のテンポについて発言した際誤りを犯し、この数十年の間、ブルジョア資本主義の時代から社会主義社会の時代へと移行する偉大なる日の到来を余りに間近く預言してきたと認めたのはようやく晩年になってからであった。

(1) *Friedrich Nauman*: "Das Schiksal des Marxismus", in der Hilfe, XIV, S. 65 f.

(2) この時代については、vgl. 私の Einleitung: Rodobertus

und sein Kreis, zu *Carl Rodbertus—Jagetzow*: Neue Briefe über Grundrente, Rentenprinzip und soziale Frage an Schumacher. Karlsruhe 1926. Braun, S. 1ff.

(3) これについては拙論 "Dogmengeschichtlichen Beiträge zur Verelendungstheorie", in Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, Tübingen 1920, Bd. 47, Heft I, S. 122.; Heft 2, S. 457ff. それに、そこにおさめられた文献案内を参照されたい。

(4) Protokoll der Verhandlungen des Parteitags zu Erfurt, 1891. Berlin 1892, Verl. Vorwärts, S. 174.

預言に際してベーベルは疑いを容れなかった。「霊感」を得ると彼はいかなる異論も許さなかった。そんな場合彼は完全に独裁者となった。といって支配欲からそうなったのではない。彼は支配欲とは無縁の男だった。そうではなく、自己の価値に対する奥深い自信からそうなったのである。ダーヴィットの次の指摘は正しい。ベーベルには問題も疑問も存在しなかった。彼にとってはその時々の見方が唯一の真理、議論の余地無く確実なことだったのである。彼は科学的、批判的に探求する質の人間ではなく、芸術的に造形する質の人間であった。彼は論理的に演繹する方法によってではなく、心理的暗示によって仕事をした。(1)

(1) *Eduard David*: Die Eroberung der politischen Macht. Sozialistische Monatshefte, 1904, Heft I, S. 16.

現代の大衆運動は常に、なかんずくその青年期には演説家によって指導される。それは、先ず経験不足並びにその政治的陶冶が低い段階にあるために、加えてその感激性と軽信のために、演説の燃えるような力に容易に魅せられ、雄弁な演説家の挑発に喜んで、時には興奮しながら屈してしまう。こうして我々は、国際的社会主義諸政党の歴史のいたるところで卓越した演説家がその頂点に立っているのをみるのである。フランスではジョレス、イタリアではフェルリ、ベルギーではヴァンデルヴェルデ、オランダではダシンスキー、そしてドイツでは先ずラッサール、次でタイプはちがうが劣らず重要なベーベル、という面々である。ベーベルのような男の弁論術は、むろん全く独自のものであった。そこには文学的躍動感はなかったが、ブレスラウのユダヤ人ラッサールの、しばしは大風呂敷と個人的虚栄に境を接する高慢な自意識、西南フランス人ジョレスの詩人的流暢、気高く清らかな理想主義、生れつき豊富な語彙、イタリアの演説家エンリーコ・フェルリの古典的なスタイル、計算された精確さ、オランダの護民官トレルストラの弁護士らしい力強さ、欝憤というものもなかった。ベーベルの弁論術は純粋にドイツ・ゲルマン的であった。生来的というより、獲得されたものであった。ベ

ーベル自身、この分野での最初の試みには大変な努力を要し、そもそも聴衆に印象を与えられるかどうかあやうく疑問視するほどであったと語っている。(1) ベルンシュタインは語っている。自分がベーベルの演説を聞いた限り、彼は祝辞を述べる類の演説家では決してない。「彼は過度なほど事柄に即した精神を有し、おまけに講義することに非常に熱中した。(2)」

（1） *August Bebel:* Aus Mein Leben. 7. Aufl. Stuttgart 1911. Dietz Nachf., Bd I, S. 91.

（2） *Ed. Bernstein:* Einige Erinnerungen an August Bebel. Frankfurter Zeitung. 1913, Nr. 234. ベーベルのような卓越した、審美的にも興味をそそる個性――彼は一八七〇年から現在までドイツ政界の最も目につく最前列に立っているのだが――が、心理学者に特別の魅力を感じさせているということは驚くに当らない。その筋で彼について物された性格スケッチの数は枚挙にいとまがない。ここでは、好意的であれ敵対的であれ、後の伝記に有意義と思われるスケッチから若干の最良のものを挙げておこう。*L. P. Tak:* Mannen van Beteekenis in onze Dagen, Amsterdam 1882; *Georg Brandes:* Aus fremden Zungen, in seinen gesammelten Schriften, I. Bd. 1902. München, Verlag Albert Langen; *Albert Weidner:* Bebel. in dem Wochenblatt Der arme Teufel, Berlin 1902, II, Nr. 21.; *Georg v. Vollmar* の優れた弁護演説 (Protokoll, Verl. Vorwärts, S. 232 ff.); *Ignaz Auer:* August Bebel am 60. Geburtstag, in den Sozialistischen Monatsheften, IV.(VI.) Jahrg. *Daniel De Leon:* Flashlights of the Amsterdam International Socialist Congress (Chapter II: Augusr Bebel p. 5–11); New-York 1906 (New York Labour News Company S. 150); *Friedlich Naumann:* Demokratie und Keisertum. 3, Aufl. Berlin 1904, Buchverlag der Hilfe. S. I ff.; *H. v. Gerlach:* August Bebel, ein biographisches Essay. München 1909. Langen. 64 S.; *Franz Klühs;* August Bebel. Der Mann und das Werk. Berlin 1923, Dietz, 395 S.

ベーベルの声は固く、時に幾分金切声となり、その響きはしばしばひび割れた鐘の音を思い出させた。しかし声の通りはよく、時には強烈な浸透力を発揮した。彼の言葉は軍隊口調で、服従を要求するかのように鳴りわたった。ひとはまるで自分が彼の実体に充満されたかのようにこの演説家に聴き入ったものである。そこには大袈裟な偽善者的興奮もなければ、熟慮された安手の説得術もなかった。ただ情熱的に呈示された信念だけがあった。ベーベルは偶然にも［筆者と同じ］ライン州の生まれであったが発声は東ドイツ的であった。なるほど身体は虚弱なほうであったが、その眼は堂々として、その透明な眼差しは相手の目を明るくしかも命令的に貫いた。ベーベルが話をする時には何か威厳のようなものが彼を包んだ。一九〇九年、当時五歳だった私の娘マンが、グリンデ

ルヴァルトで私と談話中のベーベルを、その年齢相応に観察した直後、彼女が私に問うたものである。「あの人は王様なの。」この小さな娘の素朴な質問には鋭い観察が潜んでいた。

フランスの哲学者ガブリエル・タルドは、一人の人間が大衆に及ぼす精神的引力と支配力はどのような要素から成るかという問題を考察しながら次のような必要条件をあげている。先ず第一は意志の力で、これは長期的にみるなら、常に優れた知性を伴うには及ばない。第二は信念の並々ならぬ強さと深さ、それにゆるぎない自信である。最後に第三は鋭い分析力もしくは燃えあがる空想力である。[1] タルド自身は、この三つの要素が一人の人間の中で統一されるのは稀なことであると語っている。しかしながらベーベルの場合にはこの稀な総合がみとめられるのである。彼は強い意志の人、心底から信念の人であり、興に乗った時には、他の事にはおかまいなく魅惑的な空想を発展させることも出来た。ところでむろんのことだが、ベーベルには、マリアーノ・パトリーツィが演説家について行なっている分析も又本質的な点であてはまる。演説家とは蓄積されたエネルギー、強大な意志力、度し難い楽観主義（パトリーツィによると悲観主義的な演説家というものは存在しない、そのような存在は形容矛盾であろうから）の持主である。ただ演説家は創造的な活動は出来ない。パトリーツィの言葉を使うなら「偉大な演説家で、その追憶にほんのわずかでも、自然科学、精神科学、社会科学のいずれであれ新しい発見がむすびついているような人の名を挙げることは不可能に等しい。演説家とは既成の価値を伝達する才能のある者の謂であり、独自の価値を生み出す天才の謂ではない。」偉大な演説家を数十人も輩出しながら、思想家や芸術家は僅かしか生み出していないアメリカの例は、雄弁の技師を育てるには純粋に物質的な文化で充分であるということを証している。[2] ベーベルも断然卓抜な理論家ではなかった。

（1）*G. Tarde:* L'Action Inter-mentale. Grande Revue, IV, II, p. 321.

（2）*Mariano I. Patrizi:* L'Oratore. Saggio Esperimentale, illustrato da 87 incisioni. Milano 1912. Frat, Treves. S.328.

それにしてもこの独学者は異常なほど勤勉で、多産的、有能な著述家であった。

オーストリアの若くて聡明なブルジョア婦人の一人であるアーデレ・ゲルバーは、ゲルトルート・ボイマーのドイツ女性運動史を書評した際、ウィーンの月刊誌『新女性生活』に書いている。「ところで、ベーベルの『女性と社会主義』が

ブルジョア的女性運動にも及ぼしている大きな影響についてわずかでも言及すべきであったのではないか。」[1] ところがこのように難じられた本人自身は、あらかじめ、しかも全く称賛に値する公平さで、ベーベルの書物に、女性問題に関する同時代人の文献の中でもブルジョア的観点からみて非常に高い位置を与えているのである。そしてこのウィーンの女性が与えた一層高い評価は、その出版時にブルジョア婦人から酷評されたベーベルの書物がとっくに、それに相応しい歴史的承認を得ていることを証ししているのである。

(1) *Adele Gerber*: "Handbuch der Frauenbebgung". Neues Frauenleben, XV. Jahrg., Nr. 3.

それを得るためには、むろんのことこの労作も又三四版を重ねる必要があった。この尋常ならざる成功を理解するには、ベーベルがこの彼の主著で読者に提供した内容、そして、それが意味し意図しようとするところをはっきりさせる必要がある。というのもベーベルの『婦人論』は科学的書物であるだけではないからである。即ちそれは、たとえ常に純科学的方法によって作業されているわけでも、その結論に於いて常に異論の余地が無いわけでもないとはいえ、重大な問題を真面目にかつ立派な方法で把握し解決しようと試み、しかも歴史と現代自然科学が序め著者に供しうるあらゆる補助手段を駆使してそうしようとした書物なのである。その意味でこの労作は安んじて百科全書と呼ぶことが出来る。そこに含まれた事実資料と学説の知識をたとえ半分でも自分のものとした者は教養人と呼んでもまちがいはなかろう。この労作をたんに一人のディレッタントの無教養の献作と称する者については何をかいわんやである。その科学的価値は別にしても、ベーベルの労作は優れて政治的価値を有している。同様にそれは科学的目的と並んで政治的目的をも有している。というのもベーベルの書物は、稀にしか成功しないほどに、問題を「自己自的」としてと同時に「公準」として総合的に提起し展開しているからである。或いはむしろ、問題の考察は自己目的から出発し、挙示された事実の力を通して一つの傾向、一つの要請へと発展していくからである。

アウグスト・ベーベルが自著に冠せた『女性と社会主義』という標題はあらゆる国、あらゆる言語の数十万、否数百万の人々の長期に亙る使用によって――というのもこの書物は今やほとんどすべての文化的言語、それどころか若干の非文化的言語にも翻訳されているからだが――、いわば聖列に加えられたといってよい。もっともこの標題はもともと正確を

期して考えられたものではない。本書の内容は、著者に依れば他ならぬ女性が可及的すみやかなる社会主義社会の到来に抱く関心がここで明示され、その社会でいずれは必然的に女性が占めるべき地位が詳細に告知され解明されている、ということに尽きるわけではないからである。本書の命名としては「女性と社会主義社会」というようなものの方がより理解しやすかったであろう。何故なら本書は二つの全く異なる部分に分かれているからである。第一部は、両性がいたるところで――職場、なかんずく家族と愛情関係で――互いにとりむすぶ密接な関係に於いてそもそも可能な限り、専ら女性についてだけ論じている。ここでは古代、中世、近代に於ける女性生活の歴史、いわゆる母権制の時代から、既に相当期間続いている男性と女性の「両性の権利」の時代までの女性の歴史的な権利と義務が詳しく描かれている。さらにここでは、性的存在としての女性が論ぜられ、女性は身体的、従って又道徳的にも根拠づけられる愛情を享受する権利を有するか否かという太古以来の問題に対しては、資本主義社会とそれの生み出す性道徳の如き不条理な社会のみが女性にこの疑いのない自然的権利を拒むことが出来るのだ、という答えを与えている。ベーベルは結婚とその防害並びに障害、両性の数量的割合、その原因、実業生活へのその影響の問題を根本的かつ詳細に論じている。ベーベルは売春を、むろんブルジョア資本主義的秩序のみに必然的な社会的制度と呼んでいるのだが、それは、その恐るべき寄生物や派生物、取り持ち、人身売買、娼家等と共に、客観的な研究の対象にされる。その結果、この文化の精華が当然の烙印を押されて立ち現われてくるのはもちろんのことである。続けて著者は女性の勤労生活、それとも関係する女性の精神的、肉体的能力の問題の見事な分析的叙述にたち向い、最後に女性が現代国家で占めている法的、政治的地位を明らかにする。以上が第一部の概容であるが、内容的には第一部だけでも既に充分であるように思われる。ここで女性問題は、それがいわゆるブルジョア的問題であれプロレタリア的問題であれ、その全体にわたって論ぜられているからである。従って本書はすべての女性、即ち、中でも財産や社会的地位への思惑に邪魔されずに、ともかく学習しようと望み、又それが出来るすべての女性の講読に適しているのである。

ベーベルの労作の第一部は主として女性の歴史と現代女性の社会的地位の問題に費やされているのだが、第二部で著者は、未来に全人類が生活するであろう状態を仮説として素描

することを企てた。ベーベルは、彼が「社会主義的未来社会」と考えるもののイメージを驚くほど詳細に描き出している。この社会は生産と消費の規制、職業選択、肉体労働と頭脳労働、交換手段、教育、愛情、過剰人口、民族性という問題の数々をどのように解決することになるのか。すべては万華鏡のように読者の眼前に供される。確かに社会主義者が自分の待望する未来像を構想する場合、ある輪郭は序め与えられたものとして考え得るし、それ故、例えば領主、宮廷女官、大地主、工場主、売春婦などはそこで立ち入って考察するには及ばないのではあるが、それでもやはり、そういう基本的特徴を越えて多少とも細部に亙って描こうとする場合は別問題となる。そのような始め方をベーベルも婦人論の第二部で企てているのだが、それは常に思弁に行き着くことになり、それだけで既に、あまたの反対者を、しかも党内にさえ、予期せざるを得ないのである。それには二つの原因がある。先ず、なるほど発展はその根本的趨勢に於いて預想出来るかも知れないが、しかし、詳細にわたって、多少とも自明のものとして規定することは出来ない。第二に、確かに未来の理想の大略がこの世の社会主義政党の数十万の人々を結集させ、その理想は大略――政治的には社会的共和制、経済的には集産主義――に於いて各支持者の頭に同様に映じているではあろうが、しかしその場合でも、その積極的な部分については、少なくも未来社会の細目項目がようやく手にとる近さで評価しうるようになるまでは、不明確と不統一が支配しているのである。ロシアの例が示すように、社会主義者の団結による国家征服という現実でさえ、個々の社会主義的な諸教義、諸潮流、諸党派の間に口を開けている見解の相違や内紛を防ぐことは出来ない。さて、ベーベルがいわゆる未来国家について作り上げたイメージは、他の多くの社会主義者が既に構想したか、もしくはいわば潜在的に胸中に抱いているイメージに確かに概ね符合している。この意味でベーベルの書物はその第二部に於いても、全体としては常に、あまたの同志の歓迎を受けるであろう。我々の方はむろん多くの点でベーベルと意見を異にせざるを得ない。例えばベーベルが社会主義社会における職業選択について語っていることは説得力が無い。(1) 素質による職業の自主的選択の命令は、同じくベーベルが仮定する「行政」――これは「調整を行ない」「均衡」をもたらさねばならない――とは一致し難い。一方は他方を排する。何故なら行政はいかなる権限であれ手離すことは決してあり得ないだろうし、行政をあてにする同志達の意志のみを執行

する組織機関としての自らの使命で満足するわけは決してないだろうからである。都市人口の分散、つまりはっきり云えば都市の自壊というベーベルの見解[2]にいたっては一層我々の気に入らない。都市は依然として文化の所在地であり続けるであろう。利用者のいない劇場、図書館等をベーベルはどのように考えたのか、これは不明である。彼はそれらを郊外に移すつもりだろうか。中世初期の都市が修道院の周辺に集まったように、社会主義社会でも分散された劇場や図書館の周辺に、全く同じように都市が形成されることであろう。劇場や図書館の利用度はやはり非常に高いと考えられるからである。都市と農村の差別を撤廃しようというベーベルの試みはこうして都市の交替に終わるであろう。しかしながら依然として都市と農村の区別は非常に有益なのである。社会主義は人間を画一化するには及ばない。そうではなく、ただ一層の多様化を欲するのである。人間の個性のみならず趣味嗜好の多様化である。一方都市と農村の文化的格差は、農村部に於ける教育機会の拡大、交通路と輸送手段の増加、学校建設等々によってだけでも撤廃しうるし、そうでなくとも少なくとも減少しうる。教育問題でもベーベルの見地には同意し難い。周知のようにベーベルは、教育を完全に社会が引き受けること、従って子供達を特別の施設に収容する義務教育を主張している。民主的な共同体がこの組織を充分な監督の下に置くなら、この方法が大きな利点を有することは疑い無い。しかし、たとえそうでも筆者はやはり、自分の子供に関する決定では両親に大きな自由が留保されるべきであると思う。同様に、ベーベルのように、妊産婦ホームと保育所の一般的導入に骨を折るというわけにもいかない[3]。それに比べたらラディスラウス・グンプロヴィチの提案[4]、即ち、子供を自ら教育する親、自ら保育することを望む母親はこれを自宅で行なうことが出来るし、これに対しては、子供に施す他の助力に対してと同様社会から報酬を受ける、という提案の方がまだ望ましい。他の問題でもベーベルには与することが出来ない。彼は未来の婦人の日常的な仕事についてこうも書いている。「何らかの実業に就いている実践的婦人労働者の場合は、せいぜい一日の第二の部分で教育係、教師、養育者となり、第三の部分で何らかの芸術にたずさわったり学問にいそしみ、第四の部分で何らかの家事の機能を果す[5]。」戯れに云って、これではそのままで一日二四時間ではないか。それは別にしても、毎回毎回全く異なり、しかも、もしすべてが、あらゆるものを同じ様に包括する偉大なる半可通に終わるべきではな

いとするなら、常に並々ならぬ能力を前提とする諸活動、際限無く多様な諸活動へと一日の仕事を分配すること、これも又そもそもの実行さえ全く稀なことなのである。確かに、現代支配的な、筋力のみを使うか、もしくは脳神経のみを使う一面的で専門化された活動はそれ自身のうちに一面性を含んでいるのであり、その身体的、社会的害悪を未来社会は、身体と精神との均衡のとれた陶冶によって計画的に抑制すべく努力するにはちがいない。しかしベーベルは彼のこの要請ではやはり度を越したように思われる。そもそも法外な例外、即ち万能の天才を通例として要求しているからである。さらに加えるなら、なるほど、頻繁な労働交換、フーリエお気に入りの変化本能の思想には多くの真実と理性的なものが含まれている。労働の種類の交換はある程度は気分を新たにし喜びを加える。しかしここでも問題は程度と目標である。ジードは、単なる印象の変化による魅力的労働（le travaie attrayant）とか、一定期間後の一定期間の復帰とかいうフーリエの専心した視点こそまさしく思い通りにはいかないものである、とフーリエに異議を申し立てているが、それは正しい。毎週月曜日には一時間のギリシア語、火曜日には歴史、水曜日には数学の授業があることを知っているギムナジウムの生徒はこれを断然愉快には思わない。或いは、一定の曜日には一定の献立、例えば小牛の肉とかヌードルとか砂糖漬け菓子とか、が繰り返されることを知っている食堂の常連は少しも満足を感じない。いつも同じ繰り返しほどうんざりするものはないからである。[6] 最後にベーベルのもう二つの仮説、即ち貨幣は後には自ずと廃止されうるという仮説と、犯罪は完全に消滅しうるという仮説に触れておくべきであろう。ベーベルは自書のある個所で、大胆にも、法学文献はすべて「芟除」されるであろうとすら語っている。貨幣は交換手段として測り知れない利点を供しているし、「犯罪者的頭脳はロンブローゾの頭の中にしか存在しない」ということも未だ確定的に証明されてはいない。今となってみると、何年も前にシーモン・カッツェンシュタインがベーベルの『婦人論』に行なった批判的評注は依然として正当性をもっている。[7] その直後、それに触発されてベーベルの書いた、ほとんど徹頭徹尾新しい説明は、自書の内容を卓抜な方法で補完するに相応しいはずのものであったが、他の幾多の誤謬の削除された新版には、残念ながら全く編入されなかった。[8] ベーベルの返答を『婦人論』のテキストに加えれば、本書は誤解と曲解の多くを逸れ得たであろうから尚のこと遺憾である。

(1) S. 348.
(2) S. 401.
(3) S. 412.
(4) *L. Gumplowicz:* Ehe und freie Lieben. Berlin 1902. 4. Auflage.
(5) S. 412.
(6) *Charls Gide:* Fourie und die Lohnarbeit, im Jahrbuch für Soziologie, I, 1925. Karlsruhe, Braun, S. 357.
(7) *Simon Katzenstein:* Kritische Bemerkung zu Bebels Buch: Die Frau und der Sozialismus, Neue Zeit 1896/97, Nr. 10.
(8) *August Bebel:* Kritische Bemerkungen zu Katzensteins kritische Bemerkungen. Neue Zeit, 1896/97, Nr. 11.

ブルジョア的出版物は、敢えて、ベーベルの『婦人論』を不道徳な本と呼んだ。我々は、敢えて、と確言したのだが、それは、あらゆる不遜はそのように真実を逆転させる政党政治的な悪意に属しているからである。そしてこの嘘はなかなかあらたまらなかった。少なくとも一部の批判者が改心するまでに、先ず初めは保守的傾向の大学教授で国民経済学者のカール・オルデンベルクが登場し、彼のブルジョア的友人達に大真面で請け合う必要があった。(1) この——他の点では承認し難い——労作をもともと不道徳なものと呼ぶことは出来ない、と。それでも尚、著者の知識と並々ならぬ精励の他に、ベーベルの書物に対する最大の敬意を呼び覚ましたものは、意図の知的純粋、潑剌たる闘志、深い道徳心に基づいた義憤、内面的誠実、汲めども尽きぬ理想主義であり、これが彼の身元を保証したのである。

(1) *Karl Oldenberg:* Die Ziele der deutschen Sozialdemokratie. Leipzig 1891. Grunow, S. 67. (Evangelisch-Soziale Zeitfragen.)

ベーベルの書物の巨大な歴史的意義は、全体としてはやはり、彼がバーゼル人バッハオーヘン、アメリカ人モルガン、偉大なるユートピア主義者シャルル・フーリエ（その思い出にかつてベーベルは一巻本を献呈したことがある）(1)、この三人の利発な生徒でしかないことをはっきり示す教条的な部分よりはむしろ、全世界の社会民主党に於ける女性の理論的位置付けに及ぼした影響にある。今尚一部の社会主義者——たいていは外国の社会主義者で、確かにエンリーコ・フェルリとエルンスト・ベルフォート・バックスの名もそれに入るのだが——が女性を男性と同等で同権の存在として承認することに多かれ少なかれ冷淡な態度をとっているのに対して、ベーベルは「両性の社会的独立及び平等となしには、人類の解放は決してあり得ないのである」(2)という、再び紛れもなく古

い形式の社会主義、つまりサン・シモン主義からとってこられた綱領的テーゼで以てあらゆる女性解放運動の目標を社会主義の目標の中にきっぱりとくみ込み、こうして女性にも自分達が共通の目標実現のために闘わねばならぬ場所を指し示してやったのである。

（1）*August Bebel*: Charles Fourier. Stuttgart 1888. Dietz.

（2）〔邦訳、改訳『婦人論』草間平作訳、昭和四十五年、岩波、二一頁〕

△

ベーベルは政党人であった。完全にそうであった。もしこのような区別を欲するなら、彼は社会主義者である以上に社会民主党員であった。彼にとって党の外に救いは無かった。党が社会主義の理想を申し分無く、及至は純粋に表現していないとして党に背を向けた社会主義者は彼の理解の外であった。彼らに対するベーベルの判決は、名うてのブルジョア的反対者に対してよりも一層厳しく、公式的にもより鋭かった。後者についてはいくつかの肯定的な言葉が彼の口から発せられた。この政党人たるところにベーベルの強さと弱さが存したのである。

この男の党への愛は、聖ヨハネの祝日の山火のように明るく純粋であった。それ以外にどうあり得たろう。ベーベルはその全生涯を通して「党」のために生きてきた。その際個人的野心というものが彼を導いたことは一度もない。リープクネヒトの伝記作者が巧みに彼を誉め讃えた表現、即ち、党の指導者としてのリープクネヒトの不動の原則は党の統一と保持にある、という表現はベーベルにもあてはまる。たとえ彼が党内の抗争や痛ましい衝突――これは決して稀ではなかった――の原因の一つとなったとしても、常に次の瞬間には、とっくに妥協の言葉、和解の手段、統治の定式を発見していたのである。[1] 対立誌が巧みに称揚したように、ベーベルは「生粋のドイツ人民の子として、大義それ自身のために活動し、この大義への奉仕に骨身をおしまなかった。[2]」

（1）*Kurt Eisner*: Wilhelm Liepknecht, sein Leben und Wirken. Berlin 1906. 2. Aufl., Vorw., S. 101.

（2）Tägliche Rundschau, 13. Aug. 1913.

我々はベーベルの党への愛を燃え立つ炎になぞらえた。固い信念を胸に秘め、しばしば専横的で執念深いと咎められたベーベルのこの愛は、まるで炎のように、すべての個人的苦悩を焼き尽した。党内の反対者だけに関する限り、ベーベルほど反対者に思いやり厚く淡白な者はいなかった。労働運動

の歴史は、この男が怒りに頬を紅潮させた時に公然と党員に向って発した苛酷で無慈悲な、それどころか不当な言葉の数々を記録に留めることであろう。しかし、アウグスト・ベーベルが個人として感情を害し易く、執念深いということを示したケースは一つも無い。ベーベルは党を根本的に一つの家族のように感じていた。その家族に彼は、たとえそれが各人の重要性の度合、時々の彼の見解との一致の度合によって当然ながら段階づけられているとしても、父親のような情愛を注いだのである。本書の筆者が保管している最後の（一九〇九年九月五日付けチューリッヒ発）手紙にはこう書いてある。

「我々がスイスをたつ前に、貴君の五月一一日付けの手紙に返事を書いておこうと思います。私はひとに恨みをもつような質の男ではありません。私は大抵一年も経てば、我々の間にあるよりももっと由々しきくい違いでさえ忘れてしまうので、その脈絡などもうほとんど思い出さないほどです。政党人はその党員に対しては忘れることが出来るようにならなければなりません。その本性を決して思い違ってはならない反対者は別ですが、貴君と貴君の御令室に再会し、それにかわいい御子様とも知り合いになれたことは我々の喜びでした。皆様は無事にトリーノにお帰りになられたことと思います。皆様にどうぞよろしくお伝え下さい。敬具、ア・ベーベル」

ところで党は彼にあっても益々一つの自己目的となっていくおそれがあった。[1] 不正と損害から可能な限り党をまもること、たとえ党の存在がそれにかかっている偉大な思想を犠牲にしてもそうせざるを得ないということ、これが、意識していようといまいと、ベーベルの変わらざる気懸りであった。それが又、党であれ国家であれ、対外及至対内政策に於ける彼のしばしば不安定にみえる態度、非論理的にみえる態度の原因であった。ベーベルは何百回となく――この点ではウイルヘルム二世と肩を並べる――敵対者を死と破滅で脅しつけた。彼は修正主義者を抹殺してしまいたいと表明し、国家に転覆の不安を与えた。しかし脅迫の実行が第一の場合は分裂により、第二の場合は新たなより苛酷な社会主義者鎮圧法の誘発により党の外的組織を危くするかも知れないと悟った途端、この非妥協的な男は妥協の逃道を発見するのが常だった。ベーベルが一九〇三年の Kapuaner との激突後、三カ月もしないうちに、他ならぬこの "Kapuaner" の側に回ってしまったこと、一九〇四年イエナでゼネストを賞揚し、プロレタリアートの政治闘争に於いて有効な手段であると宣言したベーベルが、一年後のマンハイムでは正反対の立場を支持する

ようになったこと、これらは内心の無節操を表すものではなく、党を保持するという意味での戦術だったのである。ゼネスト宣言それ自体はいうまでもなく、それへの共感の声明でさえ政府を激しく刺激し、扇動的な狂奔によって、政府をして社会民主党組織をひどく害するおそれのある措置を講ずる気にさせるかも知れない、ということをベーベルはこの間にはっきりと悟ったのだ。これがこの旋回の考えうる説明である。党の安全、といってもその外的表徴である組織という意味での党の安全、これが彼の思想の中核をなしているのである。

（1）Vgl. *Robert Michels*: Zur Soziologie des Parteiwesens usw. 1. c., p, 463 ff.

しかしこの点でベーベルの性格はドイツ労働者階級の現実政策的要求にも見合っている。ベーベルは、たとえ言葉に於いてではなくともその行動に於いて、尽きることのない常に若々しい狂暴さ並びにほとばしる理想主義と過度の慎重並びに用心とをむすびつける術を心得ていた。というのも、この特性も又ドイツ・プロレタリアートに合致していたからである。ドイツ人労働者の行動への衝動は非常に控え目である。フランス人やイタリア人の意味での思慮深く自覚的な英雄主義は、ロシア人やイギリス人の無鉄砲同様、ドイツ人労働者には無縁なものである。それに対してドイツ人労働者は、この点でも一九世紀ドイツ民主主義の相続人なのだが、精神的価値に対する飽くことのない欲求を示す。それ故実務的で謹厳な労働組合の専従は、指導者として、ドイツ労働者階級を長期間満足させることは出来ないであろう。しかしベーベルは、ドイツ人労働者の心の琴線に触れるような特徴を数多くもっていた。ベーベルは、彼らの熱望を目覚めさせる方法のみならず、道徳的価値に対する飢えを満してやる方法をも知っていた。アキッレ・ローリアはその興味深いベーベル追悼文で語っている。ベーベルは手綱であると同時に拍車である。彼の業績は、党が合法性の道を踏み外しそうになるや否やそれを引き戻し、他方で、余りにどっぷりと妥協政策という柔かな枕に身を沈めようとするや否やその闘いの大義を呼び覚ますことにあったのだ、(1)と。

（1）*A. Loria*: Augusto Bebel, im Marzocco (Florenz), XVIII, N. 34, p. 3.

事実その通りである。もし党を独立した、生気に溢れた有機体、確固たる理念の道具として保持することを問題とするなら、現代の社会主義的労働運動の党指導者が日夜警戒しな

ければならない二つの危険性が存在する。指導者は先ず、絶望した一部の大衆であれ、指導者の中で全体を志向している分子であれ、その革命的衝動が単調な日常政治の鉄の鎖を突然断ち切り、壮大な、だが危険にみちた国家の牙城への攻撃を敢行するのを防止せねばならない。この攻撃は、それまでに獲得した一切のもの、それに、歴史的なものとなった集団的並びになかんずく個人的な物質利害を伴った党の外的な全構造を問い直させることになるからである。かかる攻撃が無益で発作的である間はこれも納得できる。というのも、戦意を失った党は、絵筆と画布を失った画家同様、なくもがなの代物だからである。第二に現代の党指導者は、政治生活とその必要性からくる千篇一律の業務、日和見主義の泥沼にどっぷりと沈みこんだ政治――社会民主党もこれに属している――の中で、国際的な人類の連帯という永遠の理念内容が萎縮してしまわないように、又「最終目標を目指した」社会主義の聖火が消えてしまわないように気をつけねばならない。指導者に課せられたこの困難な使命に、アウグスト・ベーベルは燃えるような情熱を傾けて忠実であろうと努めた。生涯を通してベーベルは、政治的に有害な一方の非妥協と、精神的に有害な他方の妥協とをかわるがわる強引に党世論の被告席に引き出し、それを否定したり和めたりすることを目指していた。彼はあらゆるゆきすぎの断固たる敵対者であった。このようなベーベルの党内活動に於ける二重性格は、彼の行動様式と戦術に対して、強烈な矛盾の印象を与えることになったのも一度や二度ではない。彼は行動と戦術の全体から一切の統一的方向性を払拭し、それを矛盾にみちた弾劾の下に晒したのである。ベーベルの著作集は、それらを充分に校訂し、苦労しながら適切に取捨選択しない限りは「テキスト」としては誰の後にも立ち得ないだろう。ベーベルの数多くの演説は、その理論的内容、戦術的な方法論並びに指針を考慮してみると、他の点で違いのあるものの、エンリーコ・フェルリの刻印を帯びたイタリア完全主義〔経済的改良主義とサンディカリズムの結合、経済的事実と倫理的観念の統一を志向する〕の社会主義的文献によく似ている。(1) 理論上でのその顕著な特徴は不決断と不均衡である。一九〇三年ドレスデン党大会でのベーベルの長大な演説は疑いなく彼の最も長大な演説の一つであり、特筆すべき実質的業績の一つなのであるが、それについてさえも、かつてのベーベルの党友であるヨハン・モストはこう表し得たのである。それはまるで、三歩進んでは三歩さがるエヒターナッハの跳躍行列のようである、(2) と。

挑発と熟慮との休みなき交替は、もともと、政党を圧服している国家に於ける社会主義指導者の歴史的にも論理的にも予め与えられたやり方なのである。即ち、運動の測定と達成さるべき活動の査定とが、不可能とまでは云わなくとも至難である危険な体操、これが中心になっている。そうでなくとも、その種の戦術と実践とが由々しき危険性を内包していることは明らかである。それを操るベーベルの達人技でさえ、政治的、道徳的に好ましくない影響を伴うことがあったし、加えて、ドイツ人のような興奮し易い国民には、いつでも通用するというわけにはいかなかったであろう。(3)

（1）この点を確かめたい場合は、ベーベル晩年の党大会（一九〇六年イェナ大会以降）での演説と *Enrico Ferri*: Die revolutionäre Methode (Leipzig 1908, Hirschfeld; von mir übersetzt und kommentiert). Hauptwerk des Sozialismus, herausgegeben von Georg Adler. とを比べてみればよい。

（2）Die Freie Arbeiter. Jahrg. II, Nr. 43 (Berlin 1905).

（3）もっとも、同様の戦術は、もちろん全く別の理由からではあるが、イタリア社会主義史の中でも採用されてきたし、同様の後遺症を残している。（拙著 Storia Critica del Movimento Socialista in Italia. Firenze 1926. La Voce, p. 240ff. を参照）

ベーベルの実践的能力は党の外的存立の確保を中心に発揮されたのだが、そのことは社会主義者鎮圧法下の混沌たる状況の記憶によって説明しうる。そのためベーベルの言葉には、偉大な理論家や政治家を特徴づけているかの思想的一貫性が欠けていたのも余儀無いことなのである。かくして修正主義者でさえ、長年にわたり彼ら独自の理論構造を打ち固めるべくベーベルの発言を大量に蒐集することをまさに一つのなりわいとすることが出来たほどである。(1) しかし同じことはマルクス主義者、それどころかアナーキストにも出来た。彼の言葉からは極端に異なった見地を弁護する論拠、その各々が彼を引き合いに出すことも彼の論証を得ることも可能な論拠を集めることが出来たのだが、それはベーベルという名前のもとになったバイブルを連想させるほどである。ベーベルの戦術的動揺は、多くの人がそう思いこもうとしたように、変わり易い大衆の意思を嗅ぎつけ、それに盲従する嗅覚の結果であったのではなく、(2) むしろそれはたくましい想像力と冷静で論証的な思慮という、前述の異なった性格特性間の振子運動から生じている。それは、この振子運動の基になった党の二元論へのベーベル自身の二元論の追加であった。ヘルムート・フォン・ゲルラッハは、ベーベルはいつも極度に遠い未来政策か、極度に近い目先の政策かのどちらか一方だけを遂行

してきた、と難じたものである。その中間は彼の関知しないところである。[3] その通りである。しかしこの欠陥は彼の気まぐれではなかった。それはこの男の性格と一八七〇年以降のドイツ労働運動の性格から生じたものなのである。

（1） Vgl. z. B. *Eduard David*: Sozialdemokratische Briefe über Vaterlandsliebe. III, in der Neuen Gesellschaft, BD. I, Nr. 9, vom 31. Mai 1905. S. auch Davids Rede auf dem soz. Parteitag zu Jena 1905, Protokoll S. 328.

（2） ヴェルナー・ゾンバルドは次のような見解を表明した。即ち、ベーベルの偉大さと彼の戦術的構えに於ける動揺は、彼が「常に且つ本能的に大衆の願望と思想、希望と理想の中で表出を求めているものを嗅ぎとったということに由来する」と。*Sombart*: Dennoch! Aus Theorie und Geschichte der gewerkschaftlichen Arbeiterbewegung. Jena 1900. Fischer, p., 107.）我々はこの見方には与できない。

（3） *Gerlach*: August Bebel, l. c. p. 56.

ベーベルは選挙を調整的正義の最良手段とみなした。あらゆる挑発に彼は次回の選挙を指示することで答えた。政府やブルジョア政党の社会民主党に対する実際の、もしくは想像上の不当行為のニュースが彼に届けられるや否や彼の怒りが爆発したということは、彼の回りでは周知のことに属している。そんな時のこの大声を発する小男はまるで恨みの神に化したかのようであった。しかし他方で、運命は必ずや選挙という形で敵どもに報復するであろうという宥和的な考えが彼の頭にのぼるや、この恨みはすぐさま消散してしまった、というのも周知のことなのである。[1]

（1） ベーベルの選挙信仰については若干の例証で充分であろう。「それから彼は、議会活動が再び彼をベルリンに呼び戻すまでは、毎日のように娘と湖畔へ散歩に出かけるのがみられた。彼が〔ベルリンから〕戻ってくると、彼は一年分齢老いてしまったかのように我々にはみえた。しかし彼の粘り強さは驚くべきものだった。私が当時湖畔の彼のもとへ、プロイセン議会に警察が侵入したニュース電報を持参した時は、彼は激しく憤った。『そんなことはプロセインでだけありふれたことなのだ。このみじめな警察国家でだけ可能なのだ。』しかし彼はベルリンの労働者に期待を寄せていた。彼らは必要な解答をちゃんと用意するであろう、『今か、そうでなければ選挙のときに』……。」（*Robert Albert*: Bebel zu Hause in Zürich, in der Wiener Arbeiterzeitung, XXV, 224.）もう一つ、もっと早い機会にベーベルは、党には学者が必要であり、それ故今まで以上にたくさんの学者を獲得するよう努めなければならないというブラウンの意見に、ベーベルらしい答えを与えている。『そんなことは安心して状況にまかせておけばよい。状況は、皆が考えるよりもっと速く大衆を追いやっていくだろう。もう二年世界が大騒ぎして、皇帝がもう何回か演説すればよいのだろうから』（*Lily Braun*: Memoiren einer Sozialistin. Kampfjahre. München, A. Langen, S. 259.）

この「マルクス主義的」徴表――何故ならマルクス主義は、実践的には「社会的議会主義」に化してしまったのだから――は、ベーベルが他の大多数の古参党員、きっとリープクネヒトやベルンシュタインよりも強く打ち出したものだが、そこに我々は、彼がドイツの労働者大衆から得た人気の係数みることが出来ると考える。ウィリー・ヘルパッハは、彼の知るプロレタリアートの典型的な指標として二つの特性をみとめることが出来ると考えているが、我々は彼に完全に同意する。一つは強い本能、激しい熱望である。もう一つは、この願望を行為に転化しうる断固たる行動力の欠如であり、この欠如はある種のアパシーと隣り合っている。実際、部分的には、マルクス主義が大衆に及ぼす暗示的作用はこの心理的特質に基づいている。(1) というのも、如何なる理論であれ、マルクス主義ほど、大衆のこの二つの性格特性に見合ったものはないからである。それは熱望する大衆の願望にその成就を約束し、その成就は自動的に開始するはずであるから、熱望する大衆のどんな特別の努力をも必要とはしない。(2) 熱望する大衆は党の金庫に党費を払い込み、選挙のときに社会民主党へ投票するだけでよい。他のことは「発展」が心配してくれる、というわけ。

(1) *Willy Hellpach*: Nervenleben und Weltanschauung. Wiesbaden 1906. Bergmann., S. 89. (Grenzfragen des Nerven und Seelenlebens, Nr. 41)

(2) かくして例えば、ベルンシュタインが書いているように (*Eduard Bernstein*: Die Geschichte der Berliner Arbeiterbewegung. Ein Kapitel zur Geschichte der deutschen Sozialdemokratie, IIIustriert mit Bildern und Dokumenten der Zeit. Bd. I.: Vom Jahre 1848 bis zum Erlass des Sozialitengesetzes. Berlin 1907. Buchhandlung Vorwärts. S. 401 ff. Bd. II: Die Geschichte des Sozialistengesetzes in Berlin. Berlin 1907. S. 359.) 長期に亙るビスマスクの社会主義者鎮圧法の期間は、社会主義的に組織化されたベルリンの一部の労働者が展開した受動的抵抗は人々に賛嘆のみならず驚嘆と驚愕をもたらしている。賛嘆というのは上機嫌、勝利の確信、そして信念のためであり、この見事に上演された喜劇的オペラ「サルスエラ」――ここでは厳しい警察も結局のところ道化役を演ずることになる――を支配している厚い信仰的な動機のためである。驚嘆と驚愕というのは我慢強さと行動的エネルギーと気概の欠如のためである。我慢強さと行動的エネルギー並びに気概の欠如はドイツ労働者階級の特徴であり、それによってドイツ労働者階級は世界史上たった一つの事例、即ち、大衆蜂起を一度も経験もせずに長期間の弾圧と迫害をじっと耐え抜いた事例を供することになった。ドイツ以外の世界の大都市労働者でそのような愉快な史的展開を回顧しうるのはベルリンの社会民主主義者を措いて他には一つもない。パリ、ロンドン、ブリュッセル、バルセロナ、トリーノ、ロ

ーマ、ミラノ、シカゴ、ニューヨーク、モスクワ、そしてセント・ペテルスブルクの社会主義者は暴動と街頭闘争という動乱の日々を経験している。ベルリン人は（つい最近まで）自分達の闘いを投票箱の上でだけ行い、警察の監視のついた集会室で激昂を表に現わすのもせいぜい国会で事件が起きた時だけであった。ベルリン労働運動史に関するエドゥアルド・ベルンシュタインの著作は懇切丁寧に、且つ著者の卓抜の歴史的見識によって書かれているのだが、それを読むと、ベルリンの労働者が平和部隊を編制したときの環境はそれ以後政治的にはほとんど進展していないということがはっきりわかるである。街頭での権利も、それを獲得せんとする力強い意志も持たないこのベルリン労働運動史は、プロイセン国民の支配層と被支配層を性格づけている二つの根本要因をも示している。つまり、一つは指導者に対する無限の信頼、もう一つは冷酷で独善的な官憲という伝統への度し難い執着である。

ドイツ社会民主党の党員大衆は、議会では彼らのために大決戦が行なわれているのだという考えにあまりに慣れきっているので、そのための戦略を邪魔するようなことは極力避けようとしているのだが、このことはベーベルに幸いした。このような確信が大衆の議会代表に対する態度をも規定している。帝国議会に於けるフラクションの行動は多くの問題で決定的契機、最高法規となる。議会フラクションの地位を弱めるおそれのある批判は、どんなものであれ、たとえ時にはそれが原則上の意義をもっているとしても、大衆が回避につとめるところとなる。にもかかわらず批判が行なわれた場合は、びくびくしながらかたわらへ押しのけられ、指導者によって激しく弾罪される。『ライプツィヒ・フォルクスツァイトゥング』誌がその「高利貸業」についての論説記事で幾分過度に悪意を込めてブルジョア諸政党を攻撃し（一九〇四年）、その後の帝国議会で若干の右派と中間派の演説者が、ビューロー候爵自ら読みあげたこの記事を、激昂しながら社会民主党フラクションの顔面にたたきつけたとき、それまでまさしくこの党新聞の公然たる紙友とみなされていたベーベルは躊躇なく国会議員の面前でそれを撤回する挙に出た。これは党の民主的伝統、連帯原則という伝統にはっきり抵触する仕儀であった。

ベーベルは既にその在命中に、大多数の現代の大衆指導者以上の大衆の尊敬を享受することが出来た。大衆の中には批判的欲求と並んで非常に強い尊敬の欲求が存在するので、我々はそれを、少なくともドイツのプロテスタント系大都市に於いて大衆から失なわれてしまった宗教的意識の変形と考え得るほどである。ザクセン地方の労働者の質素な住宅では、ルターの肖像画がベーベルの肖像画に置き換えられただけな

のである。同時代人の書いた、むろん政治の素人には近よりがたい文献は、大衆が自分達のベーベルをどのように受けとめ、どれほどに歓迎したかに関する叙述で満ちている。一反対者の話を聞くだけでよいであろう。「ベーベル、それは社会民主党の呪文である。これほどの投票数を党に掘りおこしたのは党の演説やパンフレットではない。ベーベル――後光――ベーベルなのだ。私は一二年前に体験した一つの光景を想い出す。ある労働者集会の行なわれている、ぎっしり詰まった大ホールの前にはまだ数千人の人々が佇んでいた。彼らは中へは入れない。警官がホールと街頭を警戒していた。人々はベーベルをせめて一目でも見て、歓呼の声で自分達の敬愛の気持を示したがっている。遂にベーベルが姿を現わし、馬車から降り立った時、一団の人々が警戒ラインを無理矢理突き破り、轟くばかりの喝采が彼に浴びせられる。さからうベーベルを担ぎ上げようとする。喜びに満ちたまなざしが彼を迎え、盲目的で武骨だが感動的なこの一団の歓迎ぶりの中を、ベーベルは苦労してやっと所定の玄関口にたどり着く。さて、それから、ホールの内と外の歓呼の声が混じり合う。一人の警部は波打つ群衆に押し込められ、驚愕し当惑して頭を振ってしまう「まったく、――これでは皇帝が来た時以上の大騒ぎだ。」[1]――「彼は我々の皇帝だ」と一人の労働者が彼に答える。この言葉はいつまでも私の胸に残っている。――そして、いたるところに新たな歓声がわきおこる。――ホールの中、演台ではこの有名人が、騒然たる興奮の中で静かに文書を整理している。「もう少しで死ぬところだった」――彼は一人の同志に語る。虚栄も、目につく衒いもない。誰かが述懐している。この男は時代の熱狂に超然としている。彼はひたすら前進、休みなく前進するつもりだ。目標は遥か遠くにこそ存在する。このような人物は、決して実現出来ない目標を抱いているものだ。[2]」社会民主党系の出版物にも、一度ならずこのような気分が反映してくる。勿論、いわば蒸留され、知的に洗練され、大衆原理に気をつかった形ではあるが。[3]著名な社会民主党系ジャーナリストは、控え目に誇張を加えながら、党大会はただただベーベルの命令を実行するだけである、というテーゼを打ち立てることさえ出来た。ベーベルの意思は党内では絶対的法律である、と。[4]とにかく、ベーベルがドイツで有している力は、至るところで彼を迎える大歓迎から、毎回、党大会の前に繰り返される、様々な傾向の同志達が彼を自分達の陣営に引き込もうとする努力まで、無数の兆候のうちにはっきりとみてとれるのである。[5]「一般党

員代表」の演説の報告記事は、たいていは数も乏しく且つお粗末なのだが、(6)この党の「大立物」の大演説は、せきばらいやつばを吐く動作まで、考えうる限りの細部にわたって報告されたのである。出版に際しても同様に、党員は二重の尺度ではかられた。一九〇四年、アイスナー指導下の『フォアヴェルツ』がベーベルの寄稿を採用しなかった時、ベーベルは百方策を講じ、〔無駄だとわかると〕意見表明の自由の制限を難じ、あらゆる党員に認められた「基本的権利」に訴える仕儀に及んだ。党機関誌への投書を公表してもらうという党員の機会は、党のヒエラルヒー編成に浴って上部から下部へ移るにつれて段階的に減少するということをベーベルはきっと知っていたにちがいない。ベーベルの寄稿に対する拒絶が党内にまきおこした波紋それ自身、問題は指導者への服従という原則の稀有の例外だったのだということを証ししたにすぎない。

(1) 本書二九頁参照〔拙訳、二四五頁〕

(2) Weidner, l. c.

(3) ドレスデン党大会での有名なベーベル演説に触れてザクセン労働者新聞（一六巻、二一六号）は次のような社説を掲載した。

「私は訴える！

先ず第一に、偉大なベーベルの二番目の演説の印象と意義を決定的にしたのはゾラ流の檄である。それは、昨日午後の大会を満した修正主義に対する激しい告発であった。そしてこれは二日目のものよりはるかに力強い演説であった。

ベーベルは早々に策が尽きてしまうのではないか、この激しい興奮の後には虚脱が続くのではないかという火曜日に浮んだかすかな危惧も、全く彼をみくびったものであることがわかった。

強力な武器で一杯の兵器庫が開け放たれ、両手に持ちきれないほど支給されたのである。

党はベーベルに何を負っているか、このことが昨日判明した。唯物史観を支持する我々としては個性を過大評価するものではないし、党の運命と性格、大衆運動の実体というものを、たとえ重要人物ではあれ一個人の意志と能力によってのみ、もしくはそれによって優先的に規定されていると考えるものではないが、それにしても、だからといって個人の影響を過小評価することはないし、それどころか、運動の形式とその時々の方向性が相当程度指導者の個性次第であるということも熟知しているつもりである。こういう制約のもとで、ドイツ社会民主党に対するベーベルの影響は巨大で強力なのであり、彼の意義は測り知れないのである。

ベーベルは三〇〇万得票のつくり出した政治状況の客観的描写から話を始める。聴衆は謹聴する。どの顔にも一つの自問が読みとれる。いつあれが始まるか、すでにキュスナハトで轟き始めたあの憤激が。演説者の方はいたって落ち着いたもので、事務的に状況説明を続けている。多くの啓発的な事柄が聞かされる。例えばフォン・シュテンゲル男爵の大蔵省書記官任命はバイエルン州の政治に如何なる意義を有するか、というような余談もそうである。――ティールマンの金庫の払底ぶりは既に、帝国が債権者と

業者に時限内に支払い出来ないほどに悪化している、と暴露した時には大きな動揺がおこった。このような話の場合も彼の表現には精神が、演説には情勢がこめられている。しかし彼の若々しい気性の力が言葉となって現われるのは、「今何を」という問いに精神の決断が迫られたときである。ベーベルはただちに事柄の中心に立ち、人を引きつけずにはおかない情熱でもって弾劾を開始する。電気に打たれたかのように聴衆は耳をそばだて、演説者の激情は彼らの頭上を跳び越えていく、――目をらんらんと輝かせ、表情から光を発し、呪縛されたように不動の聴衆は、突き上げる恐怖にとらえられた集団となって立ちすくんでいる、――深い静寂が支配する。その張りつめた注意力の静寂が突然、嵐のような歓呼、喝采、そして洪笑によって破られる。洪笑というのは、この告発の演説にも愛すべきユーモアが混っているからである、――それのみならず、辛辣な風刺も利いているのである。」

（4）アウグスト・ミュラーは拙著『政党社会学』の書評の中で――因みに彼は拙著に全幅の同意を表しておきながら、私がなかんずくアメリカの労働組合形式（トレード・ユニオン）とその害毒についてなした所見をはじめて、しかも不当なやり方で労働組合一般にまで適用し、そのうえで「集中砲火」を浴びせているのだが――ベーベルと彼の全能の権力について以下のように主張している。「指導者に見解の相違が存在しないか、彼らが少なくとも一団となって全権授託者に対峙する場合、彼らは常に支配者となるであろう。ミヘルスは正当にも、ドイツ社会民主党大会では代議員の大多数が習慣的に著名な指導者に服従する、と指摘している。事実、会議を左右するのは、この著名な指導者〔全体の〕意思ではなく、ひとえにその中の数人の意思であるということをみとめるには、最近の八回の党大会議事録に目を通しさえすればよい。ドレスデンからイエナまで、つまり一九〇三年から一九一一年までのすべての党大会はベーベル氏の望むがままに決定を下した。この男一人の意見、気分、戦術的考慮に党大会議決は懸っている。もし彼が昨年、極左の側に立つことを得策と考えていたとしたなら、今回彼が裁可したようなモロッコ問題に対する党首脳の態度決定を党大会は断罪したことであろう。」（Annalen für soziale Politik und Gesetzgebung, Bd. I, Heft 4/5.

（5）指導者及び党人としてのベーベルについては拙著『政党の社会学』同所と人名索引を参照せよ。

（6）*Eduard David*: Fraktion und Parteitag, im Vorwärts, Jahrg. XXII, Nr. 131.

グスタフ・エルヴェはあるインターナショナル大会（シュトットゥガルト、一九〇七年）で、ベーベルを「皇帝ベーベル」と呼びかけフランスとイギリス代表の爆笑をさそったことがある。(1) この比喩は、根底的にではなくとも、例をみないほど重大で決定的な兆候という点ではあたっている。(2) 一方には、自分の国ドイツを気に入らない「不平家」がいるときは、ドイツを立ち去り移住するよう勧告したウィルヘルム二世がいる。他方には、党内でくすぶり続ける不平不満や不穏の動きは、結局はすっかり払拭してしまわねばならぬと恫喝

し、党首脳部の行動に同意を表しない反対派は党を「逃げ出す」べきであると主張するベーベルがいる。[3] 実際、自由意思による組織（党）の指導と自由意思によらない組織（国家）の統治、つまり、入党すべき組織と生まれつき所属する組織との間にある区別の他に、この二人の態度には如何なる区別が存在するのだろう。党首脳の重鎮ならほとんどの者は、かつていわゆる太陽王が自分の国家について語ったと同じように考え、行動するのであり、そして、もし彼が激情的人間であるか誠実な性格の人間であるなら、こう公言するのである。一方は「国家、それは私だ」、他方は「党、それは私だ」、と。[4]〔党〕官僚と党全体、前者の利害と後者の利害との同一化は完璧である。従って党官僚は、あらゆる実質的な攻撃を自己自身に向けられたものとみなす。皇帝は異論というものには我慢ならない。何故なら彼は神の恩寵によって存在しているからである。党の領袖も同様である。何故なら彼は人民の恩寵によって存在しているからである。大衆に対する両者の支配権力には一つならざる共通点が存する。大衆の両者に対する態度についてそうであるのと同様である。後にベーベルはまるで皇帝のように埋葬されたのである。[5]

（1） Vgl. Compte-rendu du Congres International de Stuttgart, en 1907.

（2） 本著九頁、二六頁参照〔拙訳、二二七頁、二四二頁〕。

（3） ドレスデン党大でのベーベルの演説、Protokoll, S. 308.

（4） 一九〇三年ドレスデン大会に於けるゲオルク・フォン・フォルマールによるベーベルの性格描写を参照、Protokoll, S. 321 ff.

（5） Vowärts, XXXX, Nr. 210.

「ベーベルの葬儀

チューリッヒからの報告によると、我らが亡き闘士の葬儀の式次第は次の通りである。

埋葬の儀式は日曜午後二時と決められた。午後一時、「人民の家」で棺台に乗せられた遺体がシェーンベルク通五番地の喪家（シモン博士婦人、旧姓ベーベル）へと運ばれる。小さな変更は別にして、進行の順番は以下の通りである。

1、楽団「コンコルディア」、
2、花輪の列、
3、霊柩車、
4、花車
5、家族、遺族の車、
6、随行車、
7、葬儀委員、
(a) 帝国議会議員団、
(b) フランス代表、
(c) イギリス代表、
(d) オーストリアその他の代表、

(e)ドイツ代表、
(f)スイス代表、
8、楽団「団結」、
9、チューリッヒ地区政治委員、
10、労働団体、
葬列はレミ街、カイ橋、タル街、ジール橋、バーデ街を通ってジールフェル町営墓地に至る。
墓地への入場は事務局の発行した許可証を有する者だけに認められる。墓地入場券交付の問い合わせ先はチューリッヒ労働組合、シュタウファッハ街六〇、一階、電話二四〇四。
棺台に乗った遺体との対面は、土曜午前九時から午後八時半まで、シュタウファッハ街六〇、「人民の家」大ホールで可能である。」

アウグスト・ベーベルは自己の価値と自己のその時々の見解の無謬を強く意識していたとはいえ、そこには、多くの場合に存在する性質はみられなかった。即ち、彼は高慢ではなかったし、常に自分を無謬と考えているわけでもなかった。ヘンリー・マイヤーズ・ハインドマンはかって彼について語ったことがある。「私はベーベルとは、シュトゥットッガルトその他の所で頻繁に会った。彼は同席したほとんどの者に、ユーモアの感覚に乏しく、もしかしたら、党に於ける自分の地位、世界に対して彼が成し遂げた仕事にとてつもない大きな誇りをもっているかも知れない、陰険で近より難い男という印象を与えた。しかし、私は身近に彼を観察したのだが、この見解には与しなかった。実際私は、誇りにして当然のたくさんのことを成し遂げ、しかも私的な物欲にかくも淡白で謙虚な男、同志との日常的なつき合いでもかくも自惚れの少ない男に出会ったことは滅多にない。もし彼がいくらかでも自分の価値についての意識を披瀝したとしても、それは大目にみてしかるべきであったろう。というのもベーベルはいわばその結党時からの党員であり、又、正真正銘の労働者として出発したと同様、後年にも彼は、職業上の成功とか、入ってもあまり喜ばなかった金銭とかのために、自分に課した偉大な使命からほんの一瞬でも目を離すことがなかったからである。」(1) ベーベルは個人崇拝を嫌い、たとえどこで個人崇拝がみとめられようと、つとめてそれを拒んだものである。彼の話は全体として単純で控え目であった。彼が極力我意を抑えていたということ、又彼にとっては事柄が決定的なことであったということの最良の証拠は二巻本の彼の自伝であるといわれている。それは回想録とは全く類を異にするものである。何故といって、そこでは著者の体験は全く党の発展史の背後に退いているからである。他の人間は彼と同じように無私ではないし、そう努めることもない、ということが彼には

わからなかったのである。彼は荒々しく党内論争に介入し、そんな場合は相手の人格などには気をつかわなかった。それが例えばグリッレンベルガーのような旧友とか親友の場合でさえそうだった。そのため、衝突問題が解決した時、古い友情が二度と回復しえないことを深く嘆き悲しむはめになったのである。

（1）*H. M. Hyndman*: "Further Reminiscences", London 1913, Macmillan Co., p. 128.

ベーベルは心底生真面目であった。ひとはそれを独学者の生真面目と名づけたがった。それも全く誤りではない。独学者というのは、系統的に研究してきた者よりも自分の知識に愛着するものである。独学者は全力を傾けてそれを獲得し、夜に昼をついでうちこんできたため、独学者にとって教養とは単なる嫉妬では守りきれない宝物なのであり、それに対する嘲笑と侮蔑という罪ほど労働という神聖な精神に対立するものはないのである。ところでベーベルにあっては、生真面目はそれに尽きるものではなかった。彼の生真面目は党に対する深い愛から生じている。ベーベルは指導者の義務に関して高い見識を有していた。「指導者は党の先頭に立って行進し、党に加えられんとする敵のあらゆる攻撃を真先に防ぎとめるという特権をもっている」、とかつて彼は縷々として述べたことがある。(1) そしてかかる見解表明が言葉だけではなかったことは、彼が自分の人生で幾度となく実証した通りである。彼はやはり、意見表明の自由を、必要な場合には数ヵ月、数年の投獄によって、つまり外面的な運動の自由を犠牲にすることによって購うことも辞さなかった老練の社会主義者の一人であった。

（1）*A. Bebel*: Ein Nachwort zur Vizepräsidentenfrage und Verwandtem, Neue Zeit (Sonderabdr.) 1903, S. 21.

ベーベルは、党内で彼のことを日和見主義者と攻撃し、急進主義の旗とかアナーキズムの旗さえ振り回す分子のすべてに対して、常に深い不信感を抱いていた。かかる分子は遠からず、唐突に、ブルジョア陣営とはいわなくとも、社会民主党の極右の側に姿を現わす方を選ぶことになる、というのが彼の口癖だった。歴史的にみると、ベーベルは正鵠を得ていた。党の歴史ではそのような例は枚挙にいとまがない。フォルマール、青年〔派〕の多く、カンプフマイヤー、シッペル、メルリーノ、エンリーコ・フェルリなど、ベーベルがかって急進的志操堅固という純真な原則と名前で論駁した党員の全員が、後には、ベーベル自身が折にふれて皮肉に表現したよ

うに、超急進主義から超日和見主義への脱皮を敢行することになった。[1] しかしながら、知識層出身の若い理想主義者の動揺に対して、ベーベル自身と、彼を代表とする圧倒的に議会主義的な路線とがどれほど大きな責任を有しているかということに彼は気づいていなかった。その議会主義的路線は、ほとんどがまだ未熟で経済的基盤も弱い若い学生や学究には、理想的活力の衰弱と映ったのである。ベーベルは若い学究の親切な助言者であり、彼らの運命に特別の興味を寄せていた。一体に彼は教養と学識に多大の敬意を払っていたからである。しかしながら彼は、尋常の思慮分別の故に、並びに、平和時にはほとんど排他的ともいえる実践問題とその巧みな処理に対する関心の故に、そして最後に、遍向と思われるもの、雄大なるもの、美的なるもの、英雄なるもの、ロマン主義的なるものすべてに対する、[2] しばしば小ブルジョア的とさえ思える反感の故に、性急な若者をあやつることには向いてはいなかったのである。高邁な大儀のために生命財産を犠牲に供する覚悟は有していても、党の能吏として、かの終わりの無いロープを引き続けるつもりの毛頭ない多くの血気盛んで誠実な若者は、他ならぬベーベルのおかげで党から姿を消していった。こうして党は、数多くの冒険、あいまいな狂熱、そして大型、小型のフォアヴェルツ〔前進〕将軍から身をまもってきたことは疑いない。しかし党は、多くの優れた人間と純粋な理想主義者をはねつけ、退屈で平凡、鈍重で不活発なものと化してしまった。何よりもこの学問のある若者の理想に燃えた分子は党から遠く離れ、党の続く世代はますます、高邁な精神的関心をもたない有能な職員より構成されることになった。これはベーベル自身時折感じていたことなのだが。

（1）idem. l. c., S. 19.

（2）本書の筆者が一九〇二年、初めて――キュスナハトの有名な別荘の庭であったが――ベーベルに会見した時、彼は、当時大いに喧伝されていたベルギーの社会主義者アンセールの態度のことを話した。アンセールは書面に於いて、自国の王位継承者を市民として第一の最良の仲間であると呼びかけ、概ねこれ見よがしに一八四八年のような調子で扱っていたからである。ベーベルはこの破格の扱いに憤慨した。これは全く不相応であると。現状況下では、候爵との書信交換に於いて彼の爵位を差し止めようとしても笑止千万であると彼は考えていた。

他方では実際、彼の不屈の気概と社会主義運動の最終的勝利に対する深い信念の故に、ベーベルは、指導的労働者のある部分、即ち、下層の出身者で党や労組の高位高職に就き、現在の晩年を安穏と暮らし、不信仰の静寂主義とか信仰薄い

静寂主義の境地に入ってしまった連中には不満を抱き、時にはそれが軽蔑にまで高じることもあった。ベーベルは一度ならず、彼自身が名づけたところの「立身出世した労働者」に対する憤懣をもたらした。彼らは、「自分の社会的地位のある一断面だけに目を注ぐ人々」なのだと。(1) その際ベーベルは、このような過程の不可抗性についての貴重な認識を披瀝した。つまり、唯物史観それ自身の教えるところによると、元労働者が自分の階級から社会的、経済的に疎外されると、それには必ずイデオロギー的疎外が伴わざるを得ない、と彼は語っていたからである。同じくベーベルは、政府の政策から野党の側に生じた影響——これはこれで必然的に与党にも変革的に作用するのだが——についても明白に認識していた。「社会主義政党が一部のブルジョアジーと結託して政府の政策を遂行する時、社会主義政党は最良の闘士を突き放し、アナーキズムと一匹狼へと追いやるのみか、非常に胡散臭いブルジョアジーの一群を自らの回りに集めることになろう。(2)」というのも、多くのブルジョア分子は、「自分達のブルジョア政党では手に入らないものを巨大な社会主義政党の内に見出せる」と考えるからである。(3)

(1) Protokoll über die Verhandlungen des Parteitags zu Dresden 1903. verl. Vorwärts, S. 230.

(2) アムステルダム、インターナショナル大会におけるベーベル〔の発言〕("Het Volk", V. Nr. 1314. の報告による)。

(3) *A. Bebel*: Ein Nachwort zur Vizepräsidentenfrage und Verwandtem, l. c., S. 20–21.

これらの特徴が、既に直後から、党内の有力者のベーベルに対する強い信頼をもたらしたのである。マルクスとエンゲルスは、彼の思慮深さと慎重さが、同志の中の悪しき頑固者を改善しえるであろうと、彼に信を寄せていた。(1) ところが、反対派であるバクーニン派も彼に全幅の信頼を寄せていた。この点ではドイツの他のどの社会主義者も及ばなかったのだが、多くの点でバクーニン派の最も恐るべき敵対者である、他ならぬベーベルが彼らの心に共感を生んでいたのである。(2) 彼は一八七一年のコミューンをドイツ帝国議会でも心から弁護し、そのため、周知のように、ビスマルクは、ドイツ社会民主党は反国家と祖国喪失の魂によって満されているという確信を固めることになったのだが、(3) 他方でこのベーベルのコミューンに対する態度表明はインターナショナルへの招聘を彼にもたらすことになった。(4) 彼は決してそれに相応しくなかったのだが。(5) しかし彼は一生涯、勇気と信念の男であった。

彼は又、社会政策の分野でも絶大なる能力と知識を有していた。もっとも、党にとっての彼の意義はその点にではなく、むしろ先に述べた個性にあると言った方がよいであろう。節操のしっかりした、道徳的に模範的な人として、彼は党にとってかけがえのない男であった。[6] ベーベルのような人物は滅多に現われるものではない。いわんや、このような人物は、数年前あるイタリアの歴史哲学者が他ならぬドイツの社会主義指導者に関して述べたように、[7] 模倣しうるものでもない。こういう人物は、個別的にみるなら、いわばひと打ちで出来上がったものであり、自然の芸術作品なのである。自然はこういう人物を創造することによって、自然の機構は通常は平凡な作品しかつくらないのだということを我々に忘れさせようとする。それ故ベーベルには、その見逃し得ない欠陥や弱点にもかかわらず、大ルイ〔一四世〕の時代のある心理学者の言ったことがあてはまるといえるであろう。

「地上には時折、類稀れな優れた人間、その徳の故に輝き、その気高い資質の故にひとを驚嘆せしめる人間が出現するものである。その原因はもちろん、消滅後どうなったかにいたってはなおさらわからない不思議な星に似て、彼らには一人の先達も後に続く者もいない。彼らは自分達独自の種属を形成しているのである。[8]」

(1) エンゲルスのゾルゲ宛て、一八八七年三月三日付ロンドン発書簡（Briefe und Auszüge aus Briefen von Becker, Engels, Marx an Sorge und andere, Stuttgart 1906, Dietz, S. 254.）

(2) *James Guillaume*: L' Internationle. Tome II. Paris 1907. Corléiy, S. 278.

(3) ビスマルク自身、彼を多くの失策へと誘うことになった、社会民主党に対する抜き難い反感の起源について語っている。それによると、この反感は、ベーベルが帝国議会に於ける情熱的な檄の中で、フランスのコミューンを政治制度の模範として呈示し、自ら公然と国民の前で、「この虐殺者と暗殺者の〔罪の償い〕のために祈る」と告白した瞬間に始まる、という。（一八七八年九月一七日ドイツ帝国議会でビスマルクの行なった演説、Fürst Bismarcks Reden, herausgeben von Philipp Stein. VII. Band: Sozialistengesetz und Wirtschaftreform. Leipzing, Reclam, p. 93.）又、vgl. *Gustav Schmoller*: Charakterbilder. München Leipzig 1913, Duncker u. Humblot, p. 50.

(4) Vgl. *Michel Bakunin*: Il Socialismo e Mazzini. 2. Aufl. Firenze 1905, Serantoni, p. 9.

(5) 根本においてベーベルは愛国者であった。しかも、他の国民共同体の本質に対する必須の歴史的な知識も心理的な感情移入もない愛国者であったということは、しばしば彼の愛国心に「プロイセン的な」属性と傾向を与え、これが彼をナショナリストと思

わせる結果になった。しかし、例えば、フランスやイギリスの社会主義者が教宣した、戦争勃発に際してはゼネスト宣言を、という考えに彼は同意しようとしなかったのだが、こういう彼の民族主義的姿勢は、一部はやはり党に対する愛、たとえ一面的で、究極的には近視眼的ではあれ、党に対するこの熱烈な愛にも帰因せしめねばならない。にもかかわらず、彼は党の囚われ人だった。かかる国際問題に於いてベーベルが別様に振る舞ったなら、世界戦争の勃発を不可能ならしめたであろうということは充分に考えうることなのである。しかし、ここは憶断政治を行なう場所ではない。（いずれにしても拙稿 Die deutsche Sozialdemokratie im internationalen Verbande, im Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, Bd. XXV, I (1907), S. 148–231. を参照せよ。）

（6）バイエルン州政府の発行誌、バイエルン『シュターツツァイテッング』はベーベルを回想して次のように評価している。「アウグスト・ベーベルはドイツの政治生活に於いて最も注目に値する個性の持主の一人であった。卓越した才能、粘り強い勤勉、休みなき刻苦勉励はこの実直な旋盤工――彼には晩年になって初めて知的教養の宝庫の扉が開かれた――を、彼が若い時から身を捧げてきた党の頂点へと押し上げた。彼が如何なる困難な状況下でも断固として自分の信念を主張したこと、それに、彼の性格にまじり気のなかったこと、これによって彼は、党内の諸派の中で年毎にいやます声望を獲得し、のみならず、全力を傾けて彼の政治綱領と闘い、今後も闘い続けるであろう彼の精鋭なる敵対者達の個人的な尊敬さえも獲得することになったのである。」

（7）*Antonio Labriola:* Discorrendo di Socialismo e di Filosofia. 2. Aufl. Roma 1902. Loescher, p. 19.

（8）Les Caractèr de *La Bruyère*, Paris, Penaud, p. 47.